

エジプトの西部砂漠を訪ねて

長沢

栄治

東京大学東洋文化研究所教授



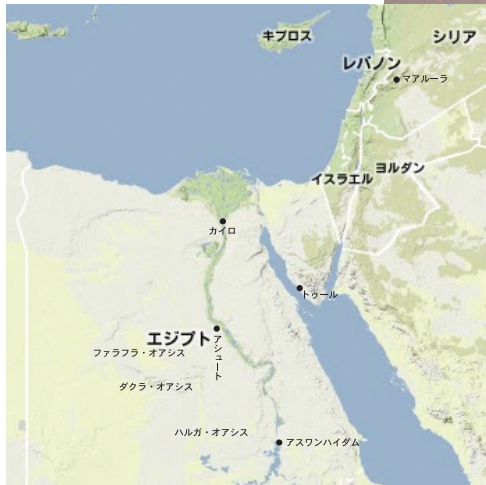
オアシス農村、ダフラ・オアシス

セドナーヤ修道院

聖母マリアの奇跡で知られるセドナーヤ修道院といえば、ぜひ訪れてみたいシリアの東方キリスト教の観光名所のひとつだ。今でもアラム語が使用されているという近くのマアルーラ村とともに、「宗教観光」の研究対象ともなっている。イスラーム地域研究カイロ国際会議のポスターセッションでも、安田慎さん（京都大学大学院）が報告の中で紹介されていた。私がこの修道院を初めて訪ねたのは、一九九一年の秋、家族旅行のときだ。購買部の修道尼さんがとても商売熱心で、貝細工の土産物などを買うことになり、「さすがにここはアラブだ」と感心したことを覚えている。

ただ今、それ以上に鮮明に思い出すのは、案内してくれたアブドッラー・ハンナさんから聞いた話だ。ハンナさんは、農民運動史や知識人の個人史など多彩なテーマに取り組んでこられた在野の社会史研究者で、そろそろ八〇に届くお歳ではないかと思うが、今もお元気で仕事を続けられている。昨年、地方史のモノグラフ（『ディル・アティーヤ村』）の寄贈を受けた。

あの日、いつもは明るいハンナさんが、厳しい顔で高台にある修道院の庭から遠い



地図



沙漠で住宅用の水道工事をする人たち、ハルガ・オアシス

眼差しを彼方に向けていた。そして、向いの丘の上にぼんやりとした輪郭を描く建物が政治囚監獄であり、共産党の友人がもう何年も収監されているのだと、声を落として語るのを聞いた。

インターネットで「シリアの政治囚」と検索すると出てくるブログのトップページに監獄の写真がある (levantdream.blogspot.com)。それがセドナーヤ監獄であるかどうかについては確証がない。だが、その姿はヨーロッパ中世の古城を思わせるように幻想的で美しく、またそれだけに怖い。

シリアの政治囚の問題は、息子のアサド大統領の時代になって一時期、改善する動きがあったかに見えたが、イスラーム主義者やクルド人などの活動家を反体制主義者として多数拘置する状況が続いている。もちろんこうした状況は、シリアだけにとどまらない。

現代アラブの政治と暴力をめぐる問題は、研究対象のごく身近に存在する厳しい現実であるにもかかわらず、自分自身はそれと向きあっているのではないのか。そう思った思ひは、中東研究を始めて以来たえずあった。セドナーヤ修道院を訪れる数年前、アムネスティ・インターナショナル日本事務所の友人から、シリアの政治囚に宛てて「私たちはあなたのことを忘れていない」という内容のアラビア語の手紙を書く依頼を受けた。そのときもそう感じたし、比較的最近ではシリア・レバノン共産党の幹部であり、アラブ連合共和国時代に非業の死を遂げたファラジュッラー・ヘルウに

ついて拙文（「アラブ共産主義者の受難」私市正年・栗田禎子編『イスラーム地域の民衆運動と民主化』イスラーム地域研究叢書3所収）を書いたときもまた、同じようなもどかしい思いを抱いた。

「監獄大学」とその卒業生たち

そのような私を励まし、成長させてくれた恩人とも感ずる人が、故ムスタファ・ティバさんである。彼は亡くなった今でも、遠い彼の地にいる他の大切な人たちとともに私を励まし続けている。ティバさんは、長い投獄経験で知られる旧エジプト共産党（旗）派の大幹部であった。その獄中体験記『愛しい人への政治囚からの手紙』の紹介とティバさん自身との交友についての文章は、十年越しで遅々としたペースで書き進めている本の中に収録したいと考えている。

ティバさんの『政治囚からの手紙』は、近年、多く出されている獄中文学とでもいふべきジャンルの先駆けとなった本である。たとえば、その最近の一冊に前衛的技法で知られる流行作家のスノアッラー・イブラヒームの『オアシス日記』がある。現代アラブ文学研究者の福田義昭さんに教えていただいたが、その脚注に書かれたエジプト共産主義運動の内幕暴露に対しては、当時の同志から相当の反発が出たという。この本は、作家が沙漠の政治囚監獄の中で書きためた劇の脚本ノートである。同じ獄中にいたティバさんの本でも紹介されているが、実際、当時の監獄には手作りの舞台



ファラフラ・オアシスの田園風景



晩年のティバさんと筆者

(1996年4月 ナイル河畔のジャーナリスト協会クラブにて、友人のご子息ムスタファ君とともに)

が設営され、世界の名作やオリジナル作品が上演され、さらに『演劇』という雑誌も発行されていた。また、党派ごとに機関紙が出され、一日に三回のニュースを流す「通信社」もあった。経済学や史的唯物論の理論研究や翻訳、外国語の学習などが行なわれ、こうした「監獄大学」の「卒業生」として多くのジャーナリスト、小説家、文化人が育ち、釈放後は各分野で活躍した。この沙漠のオアシスの政治囚監獄は、現代エジプト文化の揺籃の地のひとつであったといつてよいのかもしれない。

沙漠の収容所列島

ただし、このように獄中である程度の自由な文化的活動が許されていたにしても、もちろんそこは人間の生存の限界を試す苛烈な場所であった。東海の島国に暮らす私たちがオアシスと聞いて抱くロマンチックなイメージとは異なり、沙漠を大海に例えた場合、オアシスの監獄への収容は「島流し」に近い。さらにそこは常夏の南の島の楽園ではなく、周辺の厳しい自然条件から考えるなら、シベリアの「収容所列島」にも似た特徴があったといふべきだろう。

当時、西部沙漠にある遠隔の流刑地は、シナイ半島の僻遠の港町トゥールと並んで「太陽の裏」という名前で恐れられていたという。沙漠の監獄に移送が決まったとき、ティバさんたち政治囚を襲ったのは、タリーシャという名の毒蛇に対する恐怖であった。この「角の生えた」猛毒の蛇は、ヒエログリフの文字の一つになっているほ

ど、昔からエジプト人によく知られている。象形文字にするとかわいらしいが、実際のその凶悪な姿をご覧になりたい方は、カイロ動物園の爬虫類館を訪れるとよい。

当時、毒蛇対策で頼りにされたのが、同志のシャリーフ・ヘタータ医師であった、とティバさんは回顧している。ドクトゥール・ヘタータは、アラブを代表するフェミニスト作家ナツワール・サアダーウィーの配偶者であり、彼女の著作の英訳者として知られるが、自身も小説も発表している（以前に拙稿で紹介したことのある代表作『網』、自伝『開かれた窓』など）。この毒蛇問題など監獄内の医療活動においては、別の獄舎に収容されていたムスリム同胞団の医師たちと協力して当たったという。

政治囚監獄があったハルガ・オアシスは、ナイル川の左に広がる西部沙漠の五つのオアシス盆地の中の一番端に当たる。上エジプトの中心都市、アシユートから二四〇キロメートルほどの距離があり、その間には荒れはてた沙漠が延々と続く。それゆえ、当時のオアシスの監獄は、ソ連時代のシベリアの収容所と同様に逃亡の恐れのない、いわゆる開放刑務所で、周囲を隔てる高い塀などはなかったという。

ハルガ・オアシスは古くから流刑地として使われていたらしい。近代以降、ナイル河谷の刑事犯用の刑務所がこの地に再建されたのはイギリス占領期であった。この時期は、南からスーダンのマハーディー軍による侵攻があり、この国境近くのアアシスの戦略的重要性に対する中央政府の関心も高



沙漠の日没、ダフラ・オアシス



砂沙漠の情景



沙漠に生える「地獄の草」

まっていた。ナイル河谷からハルガ・オアシスの近くにあるグラープ（鳥）山まで鉄道が延びたのは一九〇八年だという。さらに、政治囚の収容所が建設されたのは、一九五〇年代初めのことであるが、後で述べるようにこの時期の灌漑開発とも結びついていったようである。

ティバさんが当時の王制期の政治警察によって逮捕されたのは、一九五二年の七月革命（自由将校団によるクーデタ）の直前だった。しかし、体制が変わった後も拘置は続き、逮捕当初のシタデル（城砦）監獄から、アブー・ザウバル、トゥラとそれぞれに悪名高いカイロ近郊の政治囚監獄に収容先が変わった。ティバさんたちが、同じくナセル政権に弾圧されたムスリム同胞団のメンバーと一緒にハルガ・オアシスの監獄送りとなったのは、一九五五年五月であつたというから、政治囚の収容所が建設されて数年後のことだったということになる。

映画「カルナック」の世界

沙漠の政治囚にとって、本当に恐ろしいのは毒蛇などの自然ではなく、もちろん人間であつた。ティバさんの本には、はるばるカイロから「拷問部隊」が派遣されてくる様子が描かれている。最初の拷問の対象となつたのは、ムスリム同胞団のメンバーであつたが、それが終わると次は共産主義者たちの番になった。

政治囚への拷問がどのようにおぞましいものであつたかは、九・一一事件後にBBCが制作したドキュメンタリー番組「ヘテ

ロとの戦い」の真相」（二〇〇四年）の中で紹介されている。ここで再現されている警察犬をけしかけられるシーンや、鞭打ちの場面などはイスラーム主義者に対するもので、番組では復讐に燃えた彼らがさらに過激化するというシナリオのために使われている。ただし、これらの映像は、中東初のノーベル賞作家、ナギーブ・マハフーズの小説『カルナック』を原作とする映画からの借用である。この小説は、ナセル時代の恐怖政治を描いた問題作だが、拷問に遭う青年たちがかけられた容疑は共産主義であつた。『カルナック』は、アジア経済研究所の所内資料として邦訳が出されている（『アルカルナック』一九七八年池田修訳）。映画は、一九七五年マムドゥーフ・リーシー監督作品、当時の美男美女俳優ヌール・シャリーフとスアード・ホスニーが体当たりの演技を見せて話題となった。

沙漠の監獄に拷問部隊が到着したのは、一九五九年の年末のことである。当時、アラブ連合共和国の成立とともに開始された共産主義者に対する弾圧が、エジプトとシリアの双方でいっそう苛烈さを加えていた。前述の拙稿で紹介したが、皮肉にも「ナセル、ようこそシリアへ」という論説を機関紙で書いたシリア共産党のフアラジュッラー・ヘルウが、警察の特務機関によって拘置中に虐殺されたのも同じ時期である。半年後に、ナセル支持を訴えながら拷問死したエジプトのシュフデイー・シャーフイイーと同様、アラブ社会主義体制への「非劇的忠誠」の例だといえる。



沙漠の監獄、ハルガ・オアシス

ティバさんの本でもこの時期の何名かの犠牲者の様子が描かれている。その一人にアブー・ザウバル刑務所で虐殺されたファリード・ハッダード医師がいる。ハッダード医師は、エドワード・サイードの一家にとって親子二代にわたっての主治医であった。そして共産主義運動に加わり、当時のカイロの庶民街で貧しい人たちの診療にも熱心に取り組んでいた青年であった。サイードは、自伝『遠い場所の記憶』（中野真紀子訳）で、「ファリードの生き方と死にざまは、四〇年間近くにわたってわたしの人生における隠れた行動方針の一つであった」と述べている。彼のいわゆる三部作のひとつ『パレスチナ問題』（杉田英明訳）の献辞がファリード・ハッダードに捧げられていることから、その虐殺が与えた影響がうかがえる。

ティバさんの本でも、「シヨブラ（カイロ北部の庶民地区）の貧民すべてに愛された著名な内科医のファリード・ハッダード博士の殉死」についての記述がある。同志たちとともに、アブー・ザウバル刑務所に連行された彼は、刑務所長の前で衣服の上から鞭打たれ、将校から尋問と拷問を受ける（当時の刑務所長と将校は両名ともティバさんの本では実名入りで紹介されている）。「名前は何ていう、この餓鬼」「ドクトール・ファリード・ハッダード」「ドクトールだと。* *の子め。こいつを打ちすえろ、警官」。それから警官が杖と棒で襲いかかり、英雄の頭と体は粉々になった、と。

サイードの自伝には、彼がファリードの組織の上司であったアブー・サイフ・ユースフ氏を訪ねる場面が出てくる。私も調査のために、サイードが「ルーマニア様式の巨大な団地」と形容するアパートに、この古参の闘士を訪ねたことがある。それは、当時の組織のパレスチナ問題への対応についてのインタビューのためであった。ユースフ氏は、ティバさんたちとは敵対する組織（新しい夜明け）派の幹部であり、その後、自主的解党前の合同共産党の書記長を務めた経歴をもつ（私が最初に訪問したときに応対してくれた息子さんは、映画監督をしていると聞いたが、エジプトの芸能事情に詳しい故高野晶弘さんによると、名前は似ているが、「エジプトの黒澤」と彼が評していた名監督のサラハ・アブー・サイフとは関係ないとのことであった）。

ティバさんたちは、この拷問に対し「我らの主が、抑圧者（ザリム）に復讐してくださる」というこの数千年来、エジプトの農民たちが発してきた言葉をともに唱えたという。また、実名入りで書かれたこれらの抑圧者は、それぞれに天罰を受けた（事故や元囚人の復讐で）とも述べている。「神のご加護があるように。我らの主が汝等をお救いになるように」というイブヌルバラド（郷の子・真正のエジプト人の意）の声が私たちの奥深くまで貫き入ったのだ、というのがティバさんの当時の実感であった。この部分を読むと、ティバさんの付き合ひの中で宗教の問題をめぐってしばしば議論したことを思い出す。



監獄近くの村のナツメヤシ園



水田の分水工、ダブラ・オアシス



農作業を終えて帰る人たち、ファラフラ・オアシス



富農が所有する井戸の掘削機、ダブラ・オアシス



スプリンクラー灌溉、ダブラ・オアシス

ニュー・バレー開拓計画の結末

前述したように一九五〇年代初めにハルガ・オアシスに政治囚監獄が作られたのは、この時期の沙漠開発の進行とも関係していたようだ。西部沙漠の開発は、一九三八年に沙漠灌漑管理局がハルガ市に設置されたことで始まる。その後、監獄が作られた一九五〇年代以降、近代的な掘削機械によって、涸れた地表泉（アイン）を浚渫し、新しい井戸を掘削する開発事業が本格化し、五九年には沙漠開拓エジプト公社が設立された（アレイヤ・フサイン『ハルガ・オアシス』）。これが、いわゆるニュー・バレー（ワーディー・ガディード）開拓計画の出発である。

この計画は、ナイル河谷（ワーディー）に平行した大農業地帯、「第二の河谷」を西部沙漠に建設しようという一種の自然改造の試みであり、同時期に進行したアスワン・ハイダム建設と並んで、ナセル政権の野心的な開発計画の柱として喧伝された。沙漠の地下深く、スベア砂岩層に滞水する「化石水」をくみ上げて農地を拓き、ここに上エジプトなどから農民を入植させて、過剰人口問題の解決を図ろうという壮大な開発の夢であった。

囚人労働を沙漠開発に利用するという発想がどこからきたのか不明だが、同時期のナイル・デルタの西縁の沙漠開拓地、タハリール（解放）地区でも囚人による社会主義的な集団農場があったという。そして当時の、ハルガ・オアシスの監獄でも、通常の刑事犯、共産主義者、そしてムスリム同



廃棄された貯水タンク、ハルガ・オアシス



排水施設の不備から塩害の進む農地の例、ダブラ・オアシス



貯水池に排水をくみ上げるポンプ場のパイプ、ダブラ・オアシス



塩害防止のため作られた排水の貯水池、ダブラ・オアシス

胞団員が作業するそれぞれの農場があり、囚人たちが沙漠開拓に動員された。共産主義者の農園では、同志の中の農業技師が指導に当たって開墾が進められたという。幅五〇メートル、長さ百メートルのプールが作られ、政治囚同士で水泳の練習も行なわれたという話もあるくらいだから（ムハンマド・ムニール『囚人』、少なくとも当時は、驚くほどの水量があったということであろうか。

ニュー・バレー計画は、ハルガから、ダフラ、ファラフラのオアシス地帯に伸びる四五万平方キロメートルという広大な地域を開発対象とした。ただし、一九六六年までの開拓地面積は一万八〇〇〇ヘクタールで、そのうち三分の一以上は水不足のために耕作されることがなかった。また、農地とされた地域も多くが過剰な灌水と水管理の失敗のために塩害が進行し、耕作放棄に陥ったと言われる。

現在、この古い計画の存在は忘れられ、いや意図的に忘れ去られてしまっており、その実態も明らかにされていない。今やニュー・バレーと言えば、現ムバラク政権下で進められているメガプロジェクト、トシユカー・プロジェクトのことを指すらしい。このプロジェクトは、沙漠の化石水ではなく、アスワン・ハイダムの人造湖、ナセル湖にあるムバラク・ポンプ・ステーション（日本企業の技術が生かされている）から揚水したナイルの河川水を使う。シャイフ・ザイード運河（故アラブ首長国連邦のザイード大統領の援助により建



ナツメヤシの収穫作業、ダフラ・オアシス



ナツメヤシの加工工場、ハルガ・オアシス



たわわに実るナツメヤシ (実の落下を防ぐためにネットがかぶざれている)

設)を經由して、一三万ヘクタールの農地開拓を目指すという、今再びの開発の夢である。

ハルガ・オアシスを訪ねて

一方、「古い」ニュー・バレー計画の夢の顛末は、情報不足から全体的な評価が難しい。ただし、ハルガ市に空港が建設されるなど交通網の整備が進み、その後の観光開発の出发点となったのはたしかである(ただし現在は、同空港への定期航路は停止中。どこでも地方空港の運営は難しい)。そのような半世紀に及ぶ開発の歴史を経て、西部沙漠のオアシスを今、訪れると、それこそ場所によってはであるが、ナイル・デルタと見まがうばかりの豊かな農村地帯が広がっていて驚かされる。

ハルガ・オアシスを初めて訪ねる機会を得たのは、二〇〇五年三月である。加藤博さん(一橋大学)と岩崎えり奈さん(共立女子大学)が、エジプトの中央統計局の協力を得てエジプト各地の農村の世帯調査をするという計画を立て、その候補となる村々を選定する旅に誘ってくれたからだ。地中海の岸辺に接するナイル・デルタの縁辺の寒村から、この沙漠のオアシス地帯の村々まで、エジプト南北を短期間で駆けめぐる強行軍であった。ただし、こうした「エジプト隅々紀行」ができたのも、この数十年来の道路網の発達のおかげだと言わねばならない。

ハルガ・オアシスでは、監獄の近くの村を訪ね、古老から入植当初の厳しい生活から現在までの村の歴史を聞くことができ



村の歴史を語る古老



監獄近くの村の幹線道路



ハッジに行った人の家



村の子供たち、ハルガ・オアシス



村のパカーラ（よろず屋）

た。たとえば、電気がこの村に入ったのは
ようやく一九九〇年代のことだという。ま
た、古老によれば、今は涸れている「ロー
マの泉」（おそらくローマ時代ではなく、
かなり古い泉という意味）を除けば、この
地域で最初に掘られたのは、監獄内の二つ
の井戸であった。その後、村でも何本か井
戸が掘削された結果、今や一面のナツメヤ
シ園が広がっている。ただ農業以外の就業
機会というと、村内には年に二ヶ月ほど稼
働するだけのナツメヤシ加工工場があるく
らいでこれといった産業はない。村民の中
には、二百キロメートル先のアシュート郊
外のセメント工場まで、毎日、乗り合いバ
スで通勤する人も何人かいるという。
たしかに、このように沙漠を貫いて走る
舗装道路のおかげで、オアシスはもはや陸
の孤島ではなくなった。その結果、かつて
の開放刑務所は、今や高い塀で囲まれてい
る。はじめてその前を車で走り過ぎたとき
は、日没時を過ぎていた。亡くなったティ
バさんのことを思いながら見たその景色
は、忘れられない残像として脳裏に色濃く
とどまっている。オレンジ色の凶悪な光を
放つ煌煌たる監視灯に照らされ、高い塀と
獄舎が黒々とした沙漠を背景にして浮かび
上がり、さらにその上の暗い夜空には、人
間のこころすべてを食いつくすかのように
見えるほどの、恐ろしい数の星が浮かんで
いた。



オアシスの夕焼け、ファラフラ・オアシス

開発と民主主義

オアシス訪問の後、ティバさんが沙漠の監獄に移送される前に収容されていたという、アブー・ザウバルとトゥラの二つの監獄の前まで車を走らせてみた。カイロ南郊の山沿いにあるトゥラ監獄は、今でも多数のイスラーム主義者を拘置しているという。しかし、今やはるかここまでもカイロ市中心部から住宅街が延び、塙の中を見下ろせるほどの高さのアパート群が間近に迫り、監獄の周りを取り囲んでいるのを見て驚いた（周囲の住宅の上からは銃口が覗んでいるという話もあるので、近くに行く方はご注意ください）。

西部沙漠も、カイロ市郊外も、ティバさんが収容されていたときは異なり、今や監獄の周囲は開発の波ですっかり洗われているとっていいのだろう。しかし、この開発の進行と物質的な豊かさの一方で、同時に政治的な抑圧と暴力が横行するというアラブ世界の現実を、いったいどのように考え、分析すべきなのであろう。手前味噌的ではあるが、東大拠点グループ2「中東政治の構造変容」の中東民主化研究班（リーダー・松本弘さん）は、そのような問題意識を抱えながら、これまで地道な実証研究を続けてきたのであり、その成果が期待されるのである。